【104】

氏　名（本　籍）	松平（まつだいら）　誠（まこと）（東京都）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　乙　第　526　号
学位授与年月日	平成元年7月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	**都市生活文化論** **ー都市祝祭の構成原理ー**

主　査	筑波大学教授	文学博士	宮　田　　登
副　査	筑波大学教授	文学博士	綾　部　恒　雄
副　査	筑波大学教授	文学博士	大　濱　徹　也
副　査	筑波大学教授		副　田　義　也
副　査	筑波大学助教授		門　脇　厚　司

論　文　要　旨

本論文は，日本都市生活の中で展開する祝祭的行為を拠点とし，そこに反映している都市の社会・文化的な特性を発見することにより，現代都市社会の本質を究明しようとする研究である。

本論文の構成は序論と本論1～4章，補論などを加え計406頁から成っている。

序論では，これまでの研究史を整理して，テーマである「祝祭」について「日常世界の反転，それからの脱却と変身によって，日常的な現実を客観化・対象化し，それによって感性世界を復活させ，社会的な共感をうみだす共同行為」と定義し，本論文の課題と方法について述べている。とくに研究の力点は，現代都市社会の生活文化にあり，そこに投影される歴史原理を知ることによって，現代都市の祝祭に通底する伝統の意味を明確にしようとするものであり，そのために主として町内資料を使い，かつ社会調査法を多用するという研究方法が提示されている。

本論第一章では，埼玉県秩父市本町を調査例として，その原型のもつ諸特徴を述べている。伝統型都市祝祭として概念化された祝祭は，日本の高度資本主義経済への展開がすすむ1930年代まで中心的存在であった。伝統型都市祝祭には，カミと神社祭礼に依拠した生活共同とに対する共同帰属原理が求められてきたという。祭礼費を決める等級制によって明示された身分階層，祭礼役職の基準となる「筆順」による集団組織編成によって示される威信構造などが，祭礼のつど氏子集団のなかで強化再編成され，それが町内の社会構成原理として機能していたこと。そして生活共同は「本町人」層の戸主を中心にしており，基本的に排除的・閉鎖的性格をもつ強固な求心性，凝集性をもつものと論じている。第二章ではさらに伝統型都市祭礼の調査例として府中市の大国魂神社氏子集

団をとり上げて分析している。ここでは町内の境界がたんに物理的な境界線だけでなりたつものではなく，生活共同の自己確認の範囲であることを検証し，境界観念の変容過程と生活共同の崩壊に伴なって生じた伝統的共同の観念化過程について実証している。

第三章では，非伝統的都市祝祭を合衆型都市祝祭と名づけ，東京都杉並区高円寺の「高円寺阿波おどり」を調査例とし，第一章・第二章の事例と対比させつつ論じ，その特徴を指摘している。すなわち，①祝祭の母体が地域住民を包みこんだ地域集団を超え，地縁血縁と無関係な社会縁の単位集合（連・講・党）をつくり出し，それらが祭礼のための合衆をなすこと。②氏子集団の閉鎖的祭礼に代わって，観衆が加わり「ミルースル」の相互関係をもつ，しかもそれが独立的ではなく，両義性をもっていること。③祝祭の構成単位は，氏子集団や家ではなく，個人の集合であり，加入脱退は自由でかつ，単位集合相互間の変換が活発におこなわれること。④合衆は，開放型ネットワーク構成をとり，その結節は無限に広がること，また単位集合自体が分裂合併し増殖していくこと。⑤合衆は短期間の結合であって，日常世界とのつながりが乏しく，強固な生活共同が形成されることはないこと，以上の５点を指摘している。

第四章では，以上の分析の上に立ち，現代の都市祝祭が，さまざまのヴァリエーションをもって形成しつつある合衆型祝祭と，変質しかつ観念化しつつある伝統型祝祭とが併存している状況を明示し，これらが同時に，個人的な選択をまって初めて「ミルースル」関係を成立させる価値志向的な性格をもつが故に，逆に産業社会の管理社会的価値観の中にからめとられてしまう危険性のあることを指摘し，開放系管理型祝祭の類型を提示している。その代表的な事例は，現代の企画専門企画による膨大なイベントであり，商工団体や地方自治体が計画するイベントの祭りである。これらは形態上では，合衆型祝祭に類似するが，「ミルースル」行為は，事業者・企画者の事業計画の中に吸収されており，「楽しみ」は産業社会的な目的志向にすりかえられてしまうという。そこには，すでに町内の再確認をとおしての社会統合強化という目的志向的祝祭の原型は存在していない。そこにあるのは個人が自由な選択をとおして獲得する共同のなかで「楽しみ」と自己充実であり，それは人びとの生活が，産業化の倫理より遊離しながら「ハレの日常化」を試みようとする実験であるという。すなわち祝祭空間は，個人によって主体的に選択され，いつどこでも，日常世界から離脱して入ることのできる「並びの行列」となっている。この傾向が一層強化されると，都市祝祭は，時間の流れの中で，つねに展開しているさまざまな祝祭群の選択によって成立する空間集約的なものへと転化するかも知れないと予想する。これはまた脱産業化時代に入り，時間の消費による「楽しみ」の価値に力点を置くことと軌を一にするものであるという。

現代では，こうした空間集約型祝祭の萌芽とみられるものは，盛り場や縁日にみられるという。ここでは「ミルースル」関係は，楽しむ者とその提供者とが分離しており，祝祭の本義とは離れている。今後の時間消費的な共同の楽しみがどのとように展開するかは不明であり，本論文は，こうした祝祭の未来的な類型に対し積極的なとり組みを一つの課題として残していることを述べてしめくくっている。

補論においては，日本の都市におけるカミの観念について言及し，また祭礼に関連する基礎文献・

資料として神社本庁，町内会，自治会などのデータを総覧するとともに，秩父や桐生八坂神社，白河市などで実施した補充調査について記述している。

審　査　の　要　旨

本論文は以下の三点で高く評価されるであろう。第一は，筆者がこれまで約15年の歳月をかけて行ってきた都市祭礼のフィールド・サーベイにもとづいた立論を試みており，その概念化は，新たな知見として学界で注目されていること。第二は，本論文では社会調査法を主として，集団参加観察，口述の生活史などの方法をとり入れ，都市人類学，生活学，民俗学などの分析概念を導入した学際研究の立場に立っており，その成果は十分に認められること。第三は，著者が現代社会を社会解体期ととらえ，社会的総合のゆるみが管理社会的発想を生成させているという認識に立ち，伝統型と合衆型による祝祭の再構築を理念として押し進めるという姿勢をもっており，現代に対応すべき新しい理論を提示していること，である。

こうした筆者の野心的な試みではあるが，今後に残された課題が若干ある。1つは，祝祭の定義や類型化の基準がやや不明確である点である。伝統型と合衆型とした場合にこれは発展論的志向をもつものか，循環論的志向を示すものか，本論文ではややあいまいな点があること。2つは，第四章の扱いにおいて，それまでの第2章・第3章におけるフィールド・サーベイとの間にいささか距離があるとの印象をうけること。とくに都市の盛り場の位置づけやハレの日常化についての概念定立には，別に一定のフィールド・サーベイが必要ではなかったかという点である。3つには，祭礼の変容にあたっては，当該地域の生活暦との対応をふまえた検討が必要であること。とくに近現代においては，従来の生業暦のほかに，国家，地方公共体，企業などの個有の暦の介入が不可欠の要素となっており，そうした要素への配慮が分析上望ましかったこと，以上に要約できよう。

しかし本論文は，筆者のこれまでの研究活動の実績にもとづいた都市祭礼をとおしてみた現代生活文化論として定評を得た内容であり，その集大成は，学界に新たな知見を提示したことであり，文学博士にふさわしいものと判断される。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。